

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 陳 文 佳

論 文 題 目

森春濤の香奩體詩受容と漢詩創作

—韓偓の香奩詩から森春濤の艶體詩へ—

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	加藤 國安
委員	名古屋大学教授	齋藤 文俊
委員	名古屋大学教授	神塚 淑子

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は、明治初期の漢詩壇を牽引した森春濤(愛知県一宮市生まれ)の漢詩を取り上げ、「香奩体」と称される艶体詩の受容、及び春濤の唱導により流行した清詩との関連について研究したものである。春濤が主宰した茉莉吟社には、当時を代表する漢詩人らが参集し、機関誌『新文詩』を通して春濤の天下を思わせる様相を呈したが、論者はそうした春濤の艶体詩に焦点を当て、その源流たる韓偓の香奩詩、及び王士禛(漁洋)や陳碧城の詩に論及し、春濤の艶体詩の形成や特色について解明しようと努めた。

第一章では、まず韓偓という人物の事跡について、韓偓没後最も早い資料たる『新唐書』本伝、『郡齋讀書志』等を中心に宋代資料も加えて、その字や及第前の事跡、江南・隰州・并州への旅、唐朝滅亡後の閩地入りの実態を考証した。そして詩人・政治家としての韓偓像をより明確化している。

第二章では、韓偓『香奩集』の刊行と日本での流布と影響について考察し、現存する九種の版本をもとに、三巻本『香奩集』には祖本の可能性があると指摘し、また江戸・万笈堂刊本の底本が、『唐詩百名家全集』本からの手録であるという解釈を示した。

第三章では、韓偓と森春濤の艶体詩の比較考察を行い、その結果、女性の容貌や姿態、感情や心理描写は共通するものの、その文学的才能への関心や人格への尊重は韓偓にはなく、むしろそれが春濤の大きな特色となっていることを明らかにした。その春濤の先見性が新時代のリーダーとなる要因だったことに、論者は注目している。

第四章では、春濤の王漁洋受容の実態を究明することに意を傾け、それが王漁洋・春濤ともに相次いで妻を三人も亡くすという奇遇が深く関わっていること、また春濤の悼亡詩が漁洋のそれを踏まえながらも、艶体詩風と融合して独自の新たな境地を開拓したこと等を論じた。

第五章では、春濤の編集した『陳碧城絶句』、及び春濤の刊行した『廿四家選清廿四家詩』所収の陳碧城詩をもとに、春濤の碧城愛好の理由を考察する。ことに息子の森槐南著『補春天伝奇』という、陳碧城が才女・馮小青らを哀悼した逸話に基づく物語に焦点を当て分析し、それがじつは春濤からの影響を受けたものであったこと、また春濤が碧城の溫柔な人間性に傾倒し、碧城の香奩詩に次韻しその詩語を自己の詩に取り入れたりしたこと等を論じた。さらに春濤が碧城著『頤道堂外集』を購入した時期についても検討し、早い段階から関心を寄せていたことを指摘する。

第六章では、春濤が茉莉吟社を起し漢詩文雑誌『新文詩』を創刊して、明治政府の高官らを引き入れ盛んな活動を展開した内実に迫り、その『新文詩』に掲載された漢詩の内容と特色を検討する。その結果、春濤は艶体詩を時代の先端的な作風と位置づけ、吟社や書店のすぐれた運営力で発展させていった様子を解析してみせた。

また附録として、第二章の書誌調査に関わる「九種『香奩集』目録対照表」を掲げるほか、「森春濤年譜」として制作年ごとの代表的作品も示している。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文は、明治初期の詩壇を牽引した森春濤の「香奩体詩」を中心に、その文学的資源となった晩唐・韓偓『香奩集』や、清・王士禛(漁洋)及び陳碧城との関連性について、書誌学の観点及び作品論から初めて本格的に取り組んだものである。ことに『香奩集』の書誌的系譜や流布状況を解明すべく、国立公文書館・東洋文庫・東大等及び韓国国立中央図書館等の蔵本を精力的に実地調査し、その収集・分析したものを基に、日中韓にまたがる東アジア漢文学の視点から『香奩集』の版本の流れをより鮮明にしてみせたこと、またその日本漢詩壇への影響や、流行の主導者となった森春濤の漢詩について考察したこと等に、本論文の最も大きな特色と成果が認められる。

韓偓についての資料はごく限られたものしかないが、論者はテキスト間の丹念な比較考察により韓偓の事跡を再検討し、従来、齟齬の多かった旧年譜に変わるより詳しい年譜を提示した。また版本の調査から注目すべき一つの報告が得られた。「韓偓『香奩集』の刊行及び日本での流布と影響」である。本章は日本国内に所蔵される九種類の『香奩集』の詳細な照合を通して、日本現存の最古の刊本たる江戸・万笈堂『韓内翰香奩集』(文化年間刊、館柳湾・卷大任同校)が、正文の題目、配列順、分巻の状況等から、清・席啓寓編『唐詩百名家全集』本からの手録であろうとの推測を得た。このことは、論者の高い学力と見識を窺わせるものといえよう。

韓偓の事跡及びテキストの書誌的理解を踏まえて、論者は森春濤の作品分析を展開していく。その考察の中心は、森春濤における韓偓の香奩体詩受容の具体的な実態、及び発展的独自性は何かという点にある。論者は春濤の詩的独自性を、女性の容貌や姿態、また感情や心理描写にではなく、その文学的才能や人格尊重の描写に見出している。すなわち、春濤は女性の品格や才能に対して敬意の念をもって優美な表現として歌うことで、艶体詩を新たな文学の段階へと引き上げた点を高く評価するのである。

論者は、さらに王漁洋受容の解明にも意欲的に取り組み、二人に共通する奇遇的運命が、春濤をして王漁洋の悼亡詩を意識させながら、独自の新天地を開拓させた点を詳細に論じた。このことは論者の文学的解釈力を示すものとして評価される。また陳碧城の資料的発掘を通して、春濤がこの人物にも傾倒していた実態を浮かび上がらせた功績も見逃せない。さらには春濤の起こした茉莉吟社、及び機関誌『新文詩』の見事な運営の内実を詳しく説明した点も、本論の成果といえる。

総じて、論者が漢文文化圏の漢籍の調査により、我々の学問的境界をより広域的視野へと拡大し、従来未開拓だった艶体詩の文化交流史に踏み込み、新時代の先駆けとなる女性像を鮮明に掬い取ったことは高く評価できる。ただし議論の細部には、資料の誤読や論旨の不整合がまま見られるが、それは今後十分に修正可能である。

以上、審査委員一致して、本論文が博士(文学)の学位に相応しいものであると判定した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	陳 文 佳
試験担当者	主査	名古屋大学教授	加藤 國安	
	委員	名古屋大学教授	齋藤 文俊	
	委員	名古屋大学教授	神塚 淑子	
(試験の結果の要旨)				
名古屋大学大学院文学研究科(課程博士) 審査内規第5条および第6条にもとづき、平成25年11月6日午後1時より約2時間にわたり、文学研究科130会議室において試験担当者一同、申請者に面接し、論文内容および専門分野における研究能力について口頭試問を行った結果、申請者は合格と認められた。				